

2018年10月19日(金)

未来への扉



高等特別支援学校支援部 112号

「してもら」支援からの卒業

まずは下の6コマ漫画をご覧ください。

このマンガは神戸新聞に月イチのペースで載っているマンガ&エッセー「泣いたり笑ったり 発達障害の双子の歩み」の一部です。9月に『発達障害の暮らし日記』として一冊の本にまとめられ、出版となりました。作者の森山和泉さん(兵庫県在住)は、この双子の娘たちに気持ちが伝わらず困り果てていた時に、マンガで伝える方法を知ったそうです。「お母さんは悲しい」というセリフと自身が泣く絵を見せたところ、初めて伝わった実感がありました。それがキッカケでマンガを描き始めたそうです。



本校は知的障害の特別支援学校ですが、発達障害を併せ持つ生徒もゼロではありません。この本をみると「そうそう、昔こんなことがあって苦労したわあー」と思う保護者の方もいらっしゃるのではないでしょうか。

さて、マンガの内容に戻しましょう。

妹のきいちゃんは、肉じゃがを食べることをいやがってお母さんとイヤーなムードになっています。お母さんが専門家の先生に相談し、ニンジンやお肉など食材ごとに小分けして順番に食べるようにすると完食できました。

食べ物にこだわりがある子のなかでも、視覚過敏、味覚過敏、触覚過敏など、その理由はその子によって違います。

本校にも幼い頃白飯、うどん、おとうふと白いものしか食べてこなかった生徒がいました。“白いもの”なら自分の体に入っても大丈夫と思ったのでしょうか？私も青黒いグロテスクな物を食べろと言われたら、ちょっと困ってしまいます。きっとこの生徒は視覚過敏が原因での食のこだわりだったのでしょう。

きいちゃんは「ジャガイモのもふもふと、硬いお肉がお口の中で一緒になると吐きそうになる」のだそうで、触覚過敏が原因で食べられなかったようです。だから、「食材を分けてもら」支援で肉じゃがを食べることができるようになりました。

今、大きくなったきいちゃんはどうしているのでしょうか？
じつは、きいちゃんは本校生よりちょっとお姉さんなのです。

今、きいちゃんはひとりで肉じゃがを食べます。その姿は他の人と変わらないように見えます。しかし、じっくり見るとちょっとだけ違います。まずはジャガイモ、つぎはニンジンというようにひとつの食材を食べ切ってから次の食材を順番に食べています。

しかし、それに気付く人はそういないでしょう。グループでの食事の席でも「変わった食べ方だね」といちいち言われる事もあります。

きいちゃんは「してもら」支援から卒業できたのです。
触覚過敏が100%なくなることはないでしょう。しかし、どうしたらよいかということ支援から学び、自分が自分にできる支援に置き換えることができました。こうやって自己支援をしながら生きていく術を身につけたのです。

さあ、ここからが高等部であり、社会に出る一步手前の時期を過ごしている本校生に関わる大切なお話です。

きいちゃんが卒業したように、卒業できる支援はありませんか？

例えば、「視覚支援を中学校までたくさんしてもらってきました」という生徒も多いと思いますが、今の時期「メモを取る」ことによって自己支援に置き換えるように練習をしています。

「してもら」支援	→	自己支援
食材ごとに分けてもら	→	食材ごとに順番に食べる
視覚支援してもら	→	メモをとる
?	→	?

「してもら」支援を卒業するには、もうひとつハードルがあります。自分にだけ食材を分けてくれる、つまりお母さんが双子のお姉ちゃんのもちちゃんにはしない手間を自分だけにしてくれます。自分がその立場だったら、ちょっとだけ可愛がられているような気になりませんか？「してもら」支援がなくなると、可愛がられなくなると感じる上に自分で考えながら食べるという面倒な事もプラスされます。「してもら」支援が続いた方がいいな～。その気持ちもうひとつのハードルになってきます。

お母さんも手間がひとつ減ったことを、ご自身が手抜きしたみたいな罪悪感があるかもしれません。

卒業できる支援があるということは成長のひとつのチャンスです。きいちゃんのように上手に卒業できるといいなあ◎

社会に出る前のこの時期に、もう一度見回してみよう◎

